〔伊勢物語塗籠本〕昔男、津のくにむばらのこほりにすみける女にかよひける、此たびかへりなば又はよもこじと思へるけしきをみて、女のうらみければ、○略下

〔古今和歌集十二戀〕題しらず　貫之

津のくにの難波の蘆のめもはるにしげきわがこひ人しるらめや

〔後撰和歌集十一戀〕題しらず　紀内親王

津の國のなにはたゝまく惜みこそすくもたく火の下にこがるれ

〔古事記上〕伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱神、○略中御合、生子淡道之穗之狹別島、○略中次生津島、亦名謂天之狹手依比賣、

津島

〔古事記傳五〕津島、名義は、萬葉十五二十六丁に、毛母布禰乃、波都流對馬とよめる如く、韓國の往還の舟の泊る津なる島なり、

〔日本書紀二十敏達〕十二年、是歲、○略中恩率參官、○百濟使人臨罷國時、○略中恩率之船、被風沒海、參官之船、漂泊津島、乃始得歸、

〔日本書紀纂疏上〕對馬、和訓猶言津島也、海津之中、所有之島也、

〔萬葉集十五挽歌〕到對馬島淺茅浦舶泊之時、不得順風、經停五箇日、於是瞻望物華、各陳慟心作歌、

毛母布禰乃、波都流對馬能、安佐治山、志具禮能安米爾、毛美多比爾家里、

〔萬葉集略解十五〕舟泊る津とかけたり、此國を續紀津島と書り、

〔津守國基集〕つしまにまかりたりしに、我國のかたは、はるかになりて、新羅のやまのみえしかば、

名津

ふなでせしはかたやいづらつしまには知ぬしらぎの山はみえつる

〔奥義抄上ノ末〕津付泊

すみよしのえなづ　なりたづ　あらつ　をかのおほつ　ひきつあづさゆみ